

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

男児の性被害の予防と支援

子どもへの性暴力について社会的な関心が高まるなか、まだまだ見過ごされているのが男児の性被害である。実際には、性暴力を受ける男児は少なくないが、性被害の予防や支援のメッセージは、女兒に向けられたものがほとんど。「男児に伝えるのに、よい資料はないだろうか」という現場のニーズに応えてくれるのが本書である。

『キツネくんのひみつ』は、ドイツで生まれた絵本である。森の幼稚園に通うキツネくんの楽しみは、隣に住んでいるオオカミのおじさんとのツリーハウスづくり。家族ぐるみでつきあいのあるおじさんは大工仕事が得意で、キツネくんのあこがれの存在。留守番だって、おじさんと一緒なら大丈夫。楽しい時間を過ごしていたのに、おじさんはキツネくんのからだに嫌なさわりかたをした。「やめて!」と言ったのに、おじさんは鼻先にキスまでしたうえ、こわい声で言ったのだ——「これはほくらのひみつだからな」。

秘密をばらしたら、パパとママが悲しむぞ。もうツリーハウスは作らないからな。おじさんの声が頭に残り、キツネくんは何も言えない。大好きなおみやげも食べられない。おじさんが夜にしのびこんできて、からだが石みたいに固まって動けなくなるキツネくん。すっかり元気をなくしたキツネくんに、幼稚園のふくろう先生は優しくお話をしてくれた。

悪い秘密はお腹のなかで育つトゲトゲみたいなもの。約束を守って悪い秘密を話さずにいると、トゲはどんどん大きくなってお腹がとても痛くなってしまいます。話したら、痛みはすっと消えるのだ、と。「もしかして、おなかがいたくなる ひみつがあるんじゃない?」

性被害を受けた子どもの戸惑いと苦しみは、からだに触られた恐怖や嫌悪感だけではない。大切な家族や



キツネくんのひみつ

ゆうきをだしてはなそう

カロリーヌ・リンク作/ザビーネ・ビュヒナー絵
亀岡智美監訳/宮崎直美訳
誠信書房
定価 1980 円 (税込)

先生に秘密があることへの罪悪感。つらかったできごとをひとりでかかえている孤立感。そして、苦しみや困惑を語るすべをもたないことへの無力感なのだ。だからこそ、大人は子どもに対して、サプライズのようなワクワクする「よい秘密」とグルーミング（加害者の手なずけ）である「悪い秘密」のちがいははっきりと教え、「いつでも話してね」と伝える必要がある。

幼い子どもに「赤信号では渡らない」「叩いちゃダメ」と繰り返すように、「プライベートパーツを見たり、触ったりするのはルール違反」と教えることは、子どもの安全を守るための基本的な教育である。とはいえ、子どもは「叩いたんじゃない、蹴っただけ」など、文字通りに理解し、概念を理解できないことがある。そのため、具体例を挙げながら、子どもが理解しているか確認するやりとりが求められる。加えて、ふくろう先生が話したように、「おなかが痛くなるひみつ」といった子ども自身の感覚を例示するのも有用である。性暴力に限らず、あらゆるストレスへの対処法を教えることにつながるからだ。

おじさんにされたことや夜が怖くなったことを打ち明けたキツネくんは、ふくろう先生に「とてもゆうかんね!」と讃えられ、家族からも「よくはなしてくれたね」と抱きしめてもらう。笑顔が戻ったキツネくんを支えたのは、身近なおとなに受け入れられることでの安心感だ。これは、性被害だけでなく、もちろん男児に限らず、トラウマ体験から回復するために重要なことである。幼児から小学生まで、いや、思春期の若者やおとなにも、広く読まれてほしい絵本である。

全編が緑を基調とする美しい色合いで彩られており、手にするだけでも安らぐ作品である。キツネくんと同じように、ひとりで苦しみをかかえている日本の子どもに届けたいという訳者の熱い思いが伝わり、監訳者の亀岡智美先生の解題もわかりやすい。

(大阪大学大学院教授 野坂祐子)